

林大節、孫文蔚、石媚此

てんじやう 天井 室の上を板にて張り塞げるもの、開板、承塵、仰塵、藻井、綺井、覆海、

てんじよ 篆書 漢字の書體の一、史書、玉筋、金剛書、

てんぢやうせつ 天長節 天子様の御生れ給ひし日をいふ、聖節、聖誕、聖旦、誕聖、降、聖

てんのめぐり 天の周 魏代に周天凡そ三百六十五度四分の一ありと、周天

てんのめぐり 天の轉 天文志に日月ともに東行西旋す、蟻の腹上をゆくが如し、磨は左旋して蟻は右行すと、左旋、

てんもんがくしや 天文學者 天文を研究せる學者、星家、曆人、天士、星翁、曆生、曆翁、曆辰家、天文家、

てんら 寺 佛教にて佛像を安置する家、仁祠、李苑、寶坊、

てんし 天子 天下の主、一國無上の君の稱、白虎通に王は天を父とし地を母とすとあり、天王、縣官、鉅公、天下父、

てんしのおば 天子の姑 天子の父たる君の姉妹に當るもの、帝之姑、大長公主、太主、王主、

てんしのし 天子の死 崩、崩落、晏駕、大行、上仙、賓天、上賓、升遐、厭代、上昇、登遐、遠適、

てんしのむこ 天子の婿 一國の主が女君にておはしまするときにあり、帝婿、附馬都尉、粉侯、

てんじん 天神 天に座す神、司慎、司盟、成池、

てんじやう 東宮御所 皇太子殿下の御所、鶴禁、龍

てんじやう 年寄 年老いたる人、老年、丈人、桑榆、西夕年、及人、乾都、眉梨、龍鐘、

てんじやう 年若 年の若き人、少年、小來、華滋、芳年、

てんじやう 取手 器具を手を持つ爲めに作り付けたる物をいふ柄、提梁、提攀、執攀、鼻紐、

てんじやう 隣國 我と境を接し隣せる地域、比郡、比境、鄰封、鄰地、比州、比鄰、

てんじやう 隣村 相接し相隣せる邑、比村、隣曲、隣邑、隣右

てんじやう 堂鴿 鴿の一種にて人家に飼育する鳥、飛奴、人日鳥、半天鴿、捕羽佳人、如逆、雪衣、

てんじやう 遠鏡 遠方を見るに用ふる眼鏡をいふ、千里鏡、鏡天鏡、

てんじやう 蜻蛉 夏秋の頃飛ぶ虫にて、翅は蟬に似て腹は蝶の大なるが如し、江雞、桑根、負勞、狐梨、蜻蛉、白宿、紗羊、青草、諸乘、

てんじやう 燈 油に心を入れて、火を點じて暗處を光らすもの、暗紅、西明夫人、明詔使、開晦公子、

てんじやう 友達 自分の交際する人、友子、學友、益友、詞契、知己、談交、心友、仁契、金蘭、芝蘭、信友、交友、盟友、莫逆、親明、雅友、伴友、同窓、同志、良友、蘭交、契友、舊知、斷琴、同朋

てんじやう 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじやう 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじやう 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

樓、青宮、春宮、東坊、儲宮、丙殿、青殿、靈宮、

てんじやうのてら 道教の寺 老子莊子の教を奉ずる道教にて立てたる寺をいふ、道院、鶴觀、雲觀、元壇、仙壇、洞府、靈宮、秘宇、元闕、靈館、清觀、靈宮、銀宮、金闕、圓房、丹壺、道觀、芝廬、福鄉、靈境、福區、殊庭、琳館、洞宮、玉洞、金壇、靈祠、眞觀、殊宮、

てんじ 冬至 最も晝間の短くなりし日にて、又最も陰の極まりし時なり、大抵十二月二十二日にして、太陽は最も南方の冬至線を過る、此の日我が國の習慣にて柚子湯に浴す、南至、升辰、亞歲、飯節、肥冬、一陽節、

てんじ 冬至 太陽が、南回歸線乃ち冬至線を直過する日にて、赤道以北は最短期なり、通常十二月廿二日とす、長至、冬至、

てんじのあくるひ 冬至の明る日 冬至の翌日をいふ、至後、

てんじのまへのよ 冬至の前夜 冬至の前一日をいふ、冬至、小至、小年夜、

てんじ 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじ 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじ 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

てんじ 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじ 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじ 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

てんじ 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじ 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじ 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

てんじ 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじ 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじ 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

てんじ 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじ 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじ 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

てんじ 豆腐 淮南王、小宰羊、軟正、

てんじ 蛸 虫の名、體蛇に似たれども足四本あり、長さ五六寸にて草葉の間を匍ふ、山龍子、泉龍、

てんじ 鯨波 大人數一度に大聲を發すること、吶喊、大関、大喊、鈞聲、

唇知、唇交、校友、苗友。  
なごり 吃 言葉滑かに出でずして、片語を幾度も繰り返して漸く話し終ること、口吃、期々、其々。  
なら 虎 山野に住む猛獸にて、毛は黄色にして黒斑線あり、於て、於て、於て、黄斑、虎斑、虎斑、山君、寅獸、寅客、伯都、李耳、李父、大端、封使君、班子、黃猛、班寅將軍、猛獸、白額將軍、巴而思、毛蟲祖。

な

な 菜 野菜の一種、蔬、蔬材、雨甲、烟苗、菘、心子菜、筍奴、白菜。  
ながきよ 長き夜 晝短くして夜の長きこと秋の夜の如し、長夜、通夜。  
なかたぢ 煤氏 二人の間に立ちて、双方の意を互に相通せしむる者、月老、伐柯人、牽牛、媒妁。  
ながつみ 長堤 川に沿ひて堤の長く連り居ること、通堤、長堤、「百里の長堤一日にして下る」  
ながあめ 久雨 久しく幾日も降り續く雨をいふ、淫雨、霖雨、留答雨。  
なし 梨 果物にして精神機に似、水分甚だ多し、山橋、百果宗、快果、玉乳、青田果、元圃實、密父、五藏刀芹、なしぢ 梨子地 金銀の細かき粉の班點を、恰も梨子の皮の胎識。

黒點の如く飾り付けたる塗物、撒金、砂金、  
なす 茄子 野菜の一種にて夏濃紫色の圓柱形の實を結ぶ、草懸甲、鼠荷、赤瓜、鼠味。  
なつ 夏 一年の四季の内にて最も暑き時候にて最も日の長き時、朱明、長夏、炎夏、炎節、槐序、炎序。  
なつば 薺 野生の草の名にて菜の一種春の七草の一、甘草、護生草、馬羊、地英菜、  
なつのあめ 夏雨 夏降る雨、隔雨、錦雨、迎梅雨、送梅、分龍雨、灌枝雨、牛脊雨、  
なつのかせ 夏風 夏吹き来る風、麥信風、夏時風、落梅風、落雨風、黃雀風、  
なつめ 菜 樹の名、葉は茶に似互生す實は楕圓形にして小きし生食すべし、聖花兒、百益紅、蚌實、紅皺、木密、細腰、羊角、雞心、

なふた 名札 自分の姓名住所等を書きたる小符即ち名刺、調刺、拜帖、門帖、  
なみだ 涙 泣く時に眼より出づる水滴、眼淚、眼泉、肝液、玉筋、  
なんてん 南天 灌木にして、幹は牡丹に似葉はからたちに似たり、其實は小さくして、養生し、秋赤色となる、南燭草、南天燭、天竹、檳榔、男綴、後草惟那木、背精、黑飯草、文烟、烏飯草、染菘、牛筋、楊桐、

なめくじ 蛞蝓 蝸牛に似て殻なき虫、其滑り行きし跡には銀色の痕を残す、蛇に恐れらる、蛞蝓、蝸牛、鼻涕虫、托胎蟲、

に

にかつ 二月 正月の次の月なり、寒終りて節分となり、漸次暖かとなる、如月、冷月、上春、仲春、夾鐘、梅見月、衣更着、令月、麗月、初花月、  
にし 虹 水蒸氣中にある時、太陽の光映じて反射し、美しき七色橋を現出するをいふ、隋天弓、帝弓、早龍、氣母、天忌、水椿、折翳、玉橋、  
にじふさい 二十歳 生れて二十年経たる人、冠齡、弱冠辰、  
にちゆう 日中 晝の真中のこと、正午、午時、日午、晴午、亭午、  
にんじん 姪娘 婦人が子を孕むこと、懷孕、任身、懷妊、  
にんじん 人參 草の名、其根は藥に用ひらる、神草、鬼蔘、黃參、山參、土精、地精、  
にはうめ 庭梅 梅の一種なれども、灌木なる故、庭などに植う、其實も小なり、故に又小梅ともいふ、都李、市下李、野李、雀梅、  
にはかじに 俄死 俄かに死すること、暴卒、頓死、暴死、水死、

にはかぶげん 俄分限 急に大金持となること、暴富、暴發、大發、

にはどり 鶏 人家に飼養せらる、鳥にして晨を告ぐる功あり、知時音、翰音、金禽、秋侯子、戴冠郎、四日將軍、燭夜、朱朱、

ぬ

ぬきかき 拔書 澤山の内より要川の處を抜き出して書き取ること、拔萃、抄録、拔抄、抄寫、  
ぬすびと 盗人 人の所有物を見付らぬ様に、竊かに取りて自分の所有物となす者、盜賊、竊盜、餘兒、輕民、梁上君子、破落戶、

ね

ねこ 猫 人家に畜はる、獸、鼠を取るに巧なり、蒙貴、烏圓、蒙頭、仙母、女奴、苗夕立、天子妃、食蟻、鼠將、白雪姑、白老、家狸、狸奴、  
ねごと 寐言 眠りて居りながら物言ふこと、囈語、睡語、寐語、

ねずみ 鼠 少き獸物にて穀類を食す故に多く人家に棲む、最も猫を恐る、次精、穴蟲、仲能、陳二公、司文府史、南宮時佐、遊仙使者、東垣執戟、殿前録事、馳道都尉、司城

主薄、西開舎人、社君、家鹿、

の

のあざみ 野薊 草の名春の初芽を生じ春の末に花を開く、  
枝葉に刺多し、小薊、青刺薊、針草、

のうぜんかつら 凌霄花 蔓生の灌木にて藤に似たり、朝顔  
に似たる五瓣の花を開く、陵君、陵時、苜、菅華、武威、  
鬼目、

のど 喉 頭と胸との間の飲食物を通ずる處、員官、元、重  
堂、重樓、重環、

のりもの 乘輿 貴人などの他出する時、又は旅人などの乗  
る輿をいふ、輜、肩輿、腰輿、板輿、兜子、兜籠、步輿、  
符輿、編輿、逍遙子、擔子、

は

は齒 家囉、斷骨、玉氏、編貝、

はい 肺 體中にありて呼吸を司る機關なり、葦蓋、虛成、  
玉堂宮、

はつみ 帚 塵芥を掃き除く具なり、笊、箒、被篋、淨君、  
はつみ 掃帚星 光芒長く尾をひきて、掃帚の如き形を  
有す星にて、其の軌道長楕圓形なれば、稀に地球軌道中を通  
過するの際に見ゆ、彗星、長庚星、長星、妖星、

はげいどう 葉鶏頭 草の名、其の葉の色赤又は黄にして美  
しき故、普通の鶏頭と區別していふ、老年、雁來紅、錦西  
風、十機錦、

はげやま 禿山 草木の生ぜざる山、童山、

はこ 筒 物品を入れる、箱、篋、

はこへ 藪藪 野生の草の名、草の初めに白き花を開き、細か  
き實を結ぶ、鷄腸草、藪草、鷄腸草、

はさみ 剪刀 物を切り切るに用ふる器、鋏、

はし 箸 食物を挟むに用ふるもの、挾、挾提、趙遠、快兒、

はし 橋 川を渡る爲め、川の上に懸けたる物、水梁、河原、長  
虹、飛空梯、

はす 蓮 草の名、池沼の泥土の内に生ず、荷、溪客、扶渠、水  
且、水華、水芝、雷芝、水芸、玉環、淨友、君子花、

はすのね 蓮根 蓮の通常食する部分をいふ、光旁、白藕、玉  
臂龍、玉節、

はすのみ 蓮子 蓮の花落ちて後に蜂の巢の如き物の中に實  
のる、取りて食すべし、湖目、玉蝸、

はせり 芭蕉 草の名、其葉甚大きく、其實は味甚だ美なり、  
巴且、甘蕉、紅蕉、牛乳蕉、

はち 蜂 虫の名、翅強くして善く飛び、尻には螫を備へ、腰  
細し、羅叉、金翼使、孔昇兒、

はちげつ 八月 秋風颯々として、秋の七草も野に笑ひ、萩の  
名物

ばうふう 防風 藥草の名、銅芸、回芸、回草、屏風、百枝、  
珊瑚菜、

ばうもん 訪問 他人の家へ尋ね行くこと、參上、參閣、伺  
候、登閣、參面、昇堂、參殿、拜趨、伺堂、

ばか 墓 人の死體を埋めし處、墳墓、塚、塚、塚、佳城、  
永宅、復眞堂、

ばかじりし 墓標 人の死體を埋めし所の標をいふ、墓表、  
桓、華表、和表、桓表、

ばかまわり 墓參 墓へ參詣すること、展省、展墓、上冢、拜  
墓、拜墳、上墓、

ばかり 秤 物の目方を計る器、天秤、關石、  
はざしり 齒軌 怒念甚しき時に齒を嚙しめて、音をさする  
をいふ、切齒、斷齒、

はくかく 博學 學問のひろきこと、行秘書、武庫、  
はくち 白痴 智慧なき阿呆者、無慧、不慧、

はくち 博打 賭博、博奕、賭家、乞頭、試年庚、  
はくちうち 博徒 賭博をなす人賭博者、松子童、  
嬰家、

はくこつ 白鳥 鳥の名、全身白く雁より大にして頭長し、天  
鷲、鳥孫公主、

はくもんどう 麥門冬 葉は細くして長く、夏淡紫色の六瓣  
花を開く、羊韭、愛韭、羊著、不死草、階前草、

はげいどう 上風、秋の下露もなつかしき月なり、秋月、仲秋、葉月、南呂、  
正秋、桂月、雁來月、弦月、

はつか 薄荷 草の名、其味に辛味を有す、故に之を製して薄  
荷葉をつくる、薄荷菜、冰喉樹、

はた 旗 棒の先端に吊るす標示の物をいふ、纛、毛羽纛、  
牙纛、愁眉纛、

はたぎを 旗竿 旗を吊るす竿をいふ、郵備、

はちのす 蜂巢 蜂房、蜂腸、百穿、紫金沙、

はつしも 初霜 冬に入りて始めて見る霜、早霜、

はな鼻 面の中央に突出して鼻を掌るもの、祖、肺門、心  
門、面山、氣戶、

はなしじやうず 話上手 話し方の巧なる人、善談、懸河、  
はなしへた 話下手 話方の拙なき人、拙語、椎儲、

はなび 花火 火薬に種々の藥劑を混じり火を點する時は恰も  
花の如く火花の散るもの、烟花、金枝、火樹、

はねつるべ 撥釣瓶 水を汲み上ぐるに勢力を省く爲めに  
作れる仕掛なり、桔槔、玉車、

はゝ母 女親、阿彌、姥北堂、晋善、阿娘、

はゝこさ 母子草 野生の草にして冬も枯れず、夏の初に  
黄色の花を開く、鼠麴草、米麴、香毛、黃蒿、苜蓿、佛耳、毛耳  
菜、

はゝ 蠅 夏に至り塵芥などより生じて、人家に集まり來り、  
七八五

少き羽のある虫、鰻、胡蝶、蒼蠅、  
 はまきり 蛤、貝の一種なり、蚌、合、漿、海蛤、文蛤、花  
 蛤、合梨、蛤蜊、  
 はんこんかう 返魂香 漢の武帝、李夫人の死せし後、此の  
 香を焼きて其内に夫人の容を見たりといふ香、驚精香、辟瘟  
 香、返生香、馬精香、  
 はんしよか 伴食家 貴き位にありながら、其實際の職務  
 をなさぬ人、尸位、素餐、兪龍、枝官、  
 はんや 班枝花 熱帯地方に産する木の實よりとる綿の如  
 きもの、木棉、瓊枝、吉貝、  
 はやて 疾風 急劇に吹き出して、速力はやく烈しき風、暴  
 風、颶風、石尤風、海颶、  
 はら腹 身體の中央部にして、諸機關を包蔵する處、玉池、  
 胴、曠野、  
 はらあて 腹巻 腹の冷むる爲めに巻き付けたる布、心衣、抱  
 腹、帕腹、脇衣、  
 はり針 布などを縫ふに用ふるもの、  
 はり 玻璃 透明にして、カッパ、鏡、瓶等を作る物、ガラス、  
 又はギヤマンともいふ、鳳梨、玻璃、冰玉、  
 ばりん 馬蘭 草の名、高さ二三尺葉と花もあやめに似たり、  
 馬蘭子、蘭草、早蒲、豕首、  
 はれ晴 好き天氣にて一點の雲なきこと、晴天、開霽、天晴、

天氣晴、清日、  
 ひ 梭 機の緯を織る具なり、梭子、木梭、織梭、  
 ひうち 燧 石と金と打ち合せて火を出す物、火刀、  
 ひかき 火撥 火を掻き立て、よく燃ゆる様になす棒、遮火、  
 銅火斗、火斗、  
 ひがしかぜ 東風 東方より吹き来る風、條風、  
 ひこぼし 彥星 七月七日の夜、七夕神として祭る星、牽牛、  
 何鼓、河鼓、結黃、  
 ひきしほ 引沙 潮の沖へ引き去ること、さしほに對して  
 いふ、退潮、  
 ひくに 比丘尼 女の僧、優婆夷、比丘尼、尼、阿梨夷、除障  
 女、式叉摩那、學法女、  
 ひくれ 日暮 太陽没して一日の晝間は盡くるなり、黄昏、た  
 そがれ、時竟、投暮、旁暮、穉曉、遊暮、定昏、天曉、天  
 黑、  
 ひそん 火損 火事などにて害を被ること、火荒、早荒（日照  
 りにて害あること）  
 ひだんし 美男子 外貌の美しき男子、那豎、寧馨兒、璧人、  
 玉人、  
 ひちよ 美女 容貌の美しき女、花見羞、解語花、溫柔鄉、姪

姜、孟載、

ひつかう 筆耕 人に雇まれて、文字を寫す人、傭書、賃書、傭  
 寫、  
 ひでりとも 日照り雲 天氣續きて、稀雨なる時の雲立ち  
 をいふ、火雲、赤雲、  
 ひどのとし 人の年 他人に對し其年をいふこと、御年とい  
 ふ意、貴庚、尊庚、貴甲、  
 ひのみち 日の道 天文上の語、太陽が直上を照す所、此の  
 線を以て天球を兩分せり、黃道、中道、光道、  
 ひのいり 日の入 太陽の西に没する時、日落、日没、日没  
 了、落日、日暮、  
 ひのし 熨斗 衣服の折目皺などを直す爲めに巾へ火を入れ  
 て其處を熨する具なり、火斗、熨斗、  
 ひばし 火箸 火を挟む箸をいふ、火筋、火叉、  
 ひばち 火鉢 灰火を置きて湯を沸かし、又は手などを焙る  
 に用ふる器、火爐、火盆、種火盆、手爐、  
 ひんつけあぶら 髪付油 髪に付くる油、頭油、香澤、芳澤、  
 ひむろ 氷室 氷を冬より夏まで貯ひ置く處、凌陰、凌室、  
 ひめもす 終日 一日の朝より夕日に至るまでを云ふ、通日、  
 鎮日、竟日、彌日、  
 ひらち 平地 平なる土地、平地、夷陸、  
 ひらなへ 平鍋 淺く平たき鍋をいふ、平底鍋、

ひらなへ 名物

ひらなへ

ひるすぎ 晝過ぎ 正午十二時過ぎて後、過午、  
 ひるのなつ 晝の七つ 舊制にて申の時なり今の午後四  
 時、哺時、申儀、  
 ひるまへ 晝前 正午十二時の前をいふ、近午、薄午、日小午、  
 日小中、上午、  
 ひるのやつ 晝の八つ 舊制にて未の時、今の午後二時な  
 り、日映、未晝、  
 ひるのよつ 晝の四つ 舊制にて巳の時、今の午後十時な  
 り、隅中、  
 ひるのそと 日の干支 日に十干十二支を配していふ日辰、  
 ひるきの 廣野 山嶽なくして廣々としたる平野をいふ、曠  
 野、曠茫たる原野、地面曠蕩、  
 ひるみち 廣道 道の幅廣き道をいふ、廣路、上野廣小路、廣  
 陌、  
 ひをえらむ 日を撰む 事をなすに長き日を撰み定むること、  
 選擇、  
 ひをたせむ 日を定む 何月何日と約定するも、尅期、期日、  
 ふ  
 ふらふ 夫婦 男子が結婚して相つれ添ふもの、夫妻、比肩人  
 ふえ 笛 竹管に小孔を穿ちて息を吹き込み、妙音を發せし  
 むる、樂器、管、石笛、紫佩、尺八管、紫玉、

ふかきたに 深谷 谷の深く暗きやうなる所、深溪、遠谷、幽谷、

ふぐ 河豚 魚の名、氣包、豚魚、烏狼、探魚、醇疵隱士、夷魚、

ふくろふ 鳥 晝は潛み、夜は出で、小鳥などを食ふ、大さ山鳥位にて眼丸し、土巢、痴伯子、禍鳥、晝鳥、阿梨耶、不孝鳥、流離、幸胡、黃禍侯、

ふさ 總 糸麻紐等の一端を束れて、他端を垂れ散らしたるもの、流蕪、流選、條頭菜、

ふた 豚 人家に飼はる、獸にて、形野猪に似て、身體肥は尾小、亥日人君、魯津伯、長隊將軍、參軍、黒面郎、烏金、烏鬼、大關王、糟糟氏、烏將軍、

ふたう 葡萄 蔓草の名、秋、薄紫、又は薄綠等の丸き實を結び、房をなして垂る、蒲桃、草龍珠、賜紫櫻桃、黒水精、冰丸、馬乳、甘露乳、

ふたご 雙生子 二人一度に生れたる子供、雙子、

ふぢ 藤 蔓草なれども、年を経るに従て喬木の如くに成る、其花は紫色又は白色にして房をなし、垂れ下る、普賢袈裟、地珊瑚、筒子、扶留、

ふぢかま 藤袴 春宿根より生ずる草にて莖は圓くして節あり、草は淡紫色にて香氣高し、蘭草、國香、芳友、王者香、第一香、香祖、馨列侯、媚世、幽客、劍葉蘭、

ふゆのかぜ 冬の風 冬吹く寒き風、絡風、北風、尖風、

ふるひ 篩 家具の名にて、細かき粉の中に入れ振ふる器なり、篩斗、細篩、羅斗ともいふ、

ぶらんこ 鞦韆 繩によりてゆらる、儘に樂む遊戯なり、繩戲、千秋、秋千、半仙戲、

ぶろしき 風呂敷 物を包むに用ふる布、布吧、裏袱、包袱、

へい 塀 板にて圍をせる者、又土手即ち築地をいふ、貫廂、疏序、影壁、都塀、

へいめん 平民 華士族にあらぬ普通の國民をいふ、刺草臣、草莽臣、編人、白衣、白徒、白丁、散輩、提陀、沙魂、寒賤、

へうろ 袂具 書簡帖等の紙布の背を糊にて貼り、又は其周圍を細工すること、背飾、表裝、

へそ 臍 胎兒が營養分を吸收せしあとにて、腹の中央にある肉の固きもの、中極、太淵、崑崙、特樞、五城、

へちま 糸瓜 瓜の一種にて蔓は甚だ長く延び、其果實も亦長し、若きは漬けて食し、熟せし者は皮を去り、乾して物を洗ふに用ふる、布瓜、虞刺、蠻瓜、

へに 紅粉 紅花の瓣をしぼりて製煉したるもの、婦人の假粧に用ふる、臙脂、胭脂、萬金紅、春紅、

へび 蛇 體は細長くし、全身に小鱗を有する蟲にして、山野

ふつか 一日 月の第二番目の日なり、旁死魄近死魄、旁死霸

ぶつくり 佛教 釋迦の始めたる教、象教、法便門、不二法門、甘露門、慧門、法海、般若門、三昧門、破惡之方、空門、悟門、

ぶつこう 佛像 ほとけの像、金容、寶相、莊嚴、

ぶで 筆 篠を六七寸に切り、一端へ獸の柔き毛を付け、書畫を書くに用ふる具、不律、聿、毛筆、毛子、管子文、文章、管城子、中書君、毛元銳、文鋒、管城侯、毛中書、君、筆、盡心處士、毫筆、黒水郡王、尖頭奴、兔管、兔翰、敬卓、竹、筆、栗毛、寶帚、

ふなつき 船着 船を着け泊めて乗客や貨物を上げおろしする處、埠頭、船坪、船岸、歩、波止場、馬頭、渡頭、

ふなみち 船路 船の通ふ路、漕渠、漕路、溝渠、運河、漕流、ふなち、水路、川途、川路、

ふね舟 鐵又は木にて作り、水上に浮べて物を運搬し、又は戰をなす具、須臾長、浮家、浮宅、浮泥、舳櫓、

ぶんちん 文鎮 書畫などかく時、風を離れせられぬ様に押へ置く、重き物、鎮紙、套子龜、小連城、千鈞史、邊都護、叔重、句曲山民、元安、如石靜君、界方、書鎮、志齊、界尺、由準氏、鑿司直、

ふようぶつ 不用の物 不要物、長物、閑物、

ふるつみ 舊堤 年を経たるふるき堤防、舊堤、古塘、

ふゆのあめ 冬の雨 冬靜かになる雨、液雨、藥雨、

に住し、蛙を好み、なめくちを恐る、錢龍、帶、己日寡人、撥生、升卿、玉京子、率然、

べんたう 辨當 道中にて食する爲めに携帯する食物をいふ、行厨、厨傳、

ほ

ほいろ 焙爐 周圍は木にて、下面は紙を厚く貼り、長方形に作りたる物にて、之を爐の上に置き、茶を乾かすに用ふる、焙籠、烘厨、紙焙、茶焙、焙茶箱、

ほうき 崩去 天子様の御隠れ遊ばすこと、殞落、墜方、晏駕、晚駕、上仙、上賓、親崩、升遐、賓天、

ほうしや 礪砂 細物の名なり、俗に南蠻砂といふ、蓬砂、鴨砂、盆砂、早水品、特蓬殺、

ほうせんくわ 鳳仙花 又形豌豆花に似たる花を開く草にて、高さ一二尺位に長ず其花を賞するのみ、金鳳、小桃紅、染指草、早珍珠、倒影花、海臺、菊婢、好女兒花、急性、羽客、染指草、

ほうり 子々 汚水の内に生ずる細き長さ二三分位の蟲にて、浮沈する機棒を振るが如し、故に此の名あり、變じて蚊となる、倒蚊、水蟲蛆、

ほうわう 鳳凰 瑞鳥の名、故に輿の上などに其形を付く、瑞鳳鳥、應瑞鳥、鳥玉、廣昌、聖鳥、仁鳥、丹鳥、百禽長、足々、

長離、仙翰、瑞羽、儀禽、百鳥尊、

ほろねん 豊年 五穀よく熟したるゆたかなる年、稔歲、大有年、樂歲、ホ

ほくきよくせい 北極星 北方にありて少しも移動せし星をいふ、北辰、天扛殿、

ほくせい 北斗星 北方に定座せる七星をいふ、俗にはぐんせいとも呼ぶ、帝車、天車、天綱、

ほくろ 痣 人の皮膚にある小さき黒點をいふ、墨子、痣子、ほけ 木瓜 海棠に似たる樹の名なり、鐵脚梨、楡瓜、

ほし星 晴夜吾人が天を仰ぎて見れば、無数の閃々たる小なき光體をいふ、玉李、屑金、付泥、白榆、

ほしおつ 星落つ 星の落下するをいふ、星墜、隕星、ほしおほし 星多し 星の密集せるをいふ、星厚、時稠星、

ほたん 牡丹 芍薬に似たる植物にて庭園などに植ゑて其花を愛するもの、木芍薬、花王、寶相花、靡菲、鳳姑、花石、白木、百兩金、雄紅、頃刻花、富貴花、大北勝、貴客、第一香、桃黃花、洛陽花、杜鵑紅、鸚鵡白、楊家紅、瑞雲紅、京花川花、

ほたる螢 夏の夜水邊に飛び交ふ尻の光る虫なり、夜照、救火、螢火、挾火、螢火、丹鳥燐、夜光、耀夜、耀夜、景天、夜遊女子、即爛、

ほとろ子規 鳥の名夏の初め頃、ホ、在野、たすき其聲憐れなり、形ひよりに似たり、杜鵑、杜宇、野鴉、田鴉、催

歸、不知歸、邪公、怨鳥、冤禽、望帝、謝豹、思歸鳥、買鏡、婦歸、

ほね骨 體中にある堅きものをいふ、肉核、

ほほほね 頬骨 頬へ突き出たる骨をいふ、頰車、之而、頰頰、玉梁、

ほん盆 物を載す器、洗、缶、盥、升、甌、甌、甌、老瓦、ほんぼこ 本箱 本を入れ置く箱なり、書櫃、書笈、書箱、ほらあな 洞穴 山にある孔穴のこと、喇叭、

ま 玉梁、

まいあき 毎朝 昨日の朝、今日の朝、又明日の朝と日々を朝をいふ、朝々、毎朝、あさなあさな、

まいごし 毎年 年々續くこと、比年、累年、每歲、累歲、まかなひかた 賄方 食事を賄ふ人、厨人、膳夫、膳宰、伊公、易氏、

まがりみち 曲道 屈曲せる道、曲徑、曲路、まつ松 山に生ふる喬木にて、其葉、針の如く年中青し、五大夫、十八公、偃蓋山、木長官、支離叟、木中仙、宗老、鮭子南、枯龍、不臣木、千歲材、歲寒枝、

まつやに 松脂 松より出づる脂をいふ、松膏、松肪、松膠、松香、瀝青、飛節枝、

まはりごろう 回り燈籠 回轉する燈籠をいふ、走馬燈、

形燈

まむし 蝮 蛇の一種形大ならざれども其齒に毒あり其體には錢形の紋あり、蝮蛇、土虺、反鼻、蝮、

まゆ眉 目の上にある横に細長く生へたる毛、華蓋、小陽毛、衛

み

み箕 竹を細かくさき、あみて作れるもの、穀物と塵とを分くることなみに用ふ、箕、注箕、

みかど 御門 (一)皇居の門の敬稱、禁門、宮門、(二)轉じては皇居、朝廷、朝服、閣下、(三)轉じては皇帝の御家筋をいふ、朝家、國家、

みかん 密柑 味、甘酸皮は陳皮とて藥とす、大さ一定せざれども、概れ扁圓形なり、柑子、金輪藏、瑞聖奴、甘心氏、黃甘、溫尹平陽侯、

みくるま 御車 天子の乗り給ふ車のこと、王路、大路、大駕、法駕、鸞駝、帝軺、金根、車、桑根車、黃屋、鸞輿、鸞伏、神輿、帝駕、

みこ 巫女 神に仕へ神樂など奏する女、神女、巫覡、師娘、

みことり 詔 天子の發したまふ仰せをいふ、詔令、紫泥、關板、鶴書、鳳書、鳳詔、宣麻、尺一柬、制書、令甲、令乙、綸書、龍綸、

歸、不知歸、邪公、怨鳥、冤禽、望帝、謝豹、思歸鳥、買鏡、婦歸、

みぢかぎもの 短着物 着物の短、物、短衣、襦袴、みそざい 鶴鷄 吉原雀ともいふ、深林に棲む、小さき鳥、春能く轉ること爲の如し、巢を作ることに頗る巧みなり、桃蟲、工雀、

みぞれ 霰 雪の降りて地上に近づける、る、氣中のあた、かみによりて、なかに融けて落つるものをいふ、尖粒雪、雪子、櫻雪、

みたれがみ 亂髮 髮の亂れ垂るること、被髮、反首、科頭、散髮、

みちしほ 満潮 潮の高まりたる時をいふ、潮満、起信、

みつ密 甘き液汁なり、蜂の製出せるを蜂蜜、砂糖より造れるを砂糖蜜といふ、衆口芝、百花醴、露糖、華英、

みつ水 流動體にて所在の地中よりわき出づ、空氣と共に一日も欠くべからざるもの、元酒、朝、碧氏、清瑤、河車、阿迦、天綱、地鏡、壬公、至柔和、

みついれ 水注 水を入れて机上に置くもの、みつさしともいふ、水中丞、仲舎、玉蝨老翁、

みつろみ 湖 四面陸にて圍まれたる凹處に、水を満けたるもの、沼地より大なるをいふ、薄海子、

みつろみのふね 湖船 湖水上水浮ぶ船のこと、烏樗、紅核、

みつからうす 水碓 水の力にて動き米を搗く碓、水排、機碓、

みつくち 三つ口 唇さけて恰かも三つの如く見ゆるをいふ、

ふ、缺骨、鬼鉄、

みづぐるま 水車 水の力にて回転する車、桔槔、翻車、龍骨車

みづこし 水漉 水中にある固形物を除き去るに用ふる器、水羅、漉水袋、酌水羅、漉袋、

みづたて 水蓼 水中に生ずる草の名、枝の梢毎に長き穂を出す、花白し、爛れの意にて口舌に辛きより此の名あり、蓼、藜、澤藜、

みつばち 蜜蜂 蜂の一種、蜜を釀すもの形は穴あぶに似て小なり、蠟峰、蜜蟲、釀蜜蜂、

みつまた 汎 川の三方に分れ流るゝ處、水分流、水岐流、

みつむし 朝菌 夏期濕氣多き土地の氣にて、農夫の足などに痒痒を成せしむること多し、蟻母、蟲邪、白露蟲、魚蠅、

みなど 港 (一)海の陸に入り込み或は河口などにて船舶の碇泊すべし處、港、安港、(二)海水の出入すべし門戸をもみなど又はせといふ、水門、

みにくきんな 醜女 容貌美しからざる婦女、醜態、

みのがめ 養龜 常の龜の年老いて甲に毛の如き絲苔つきて水中を行けば後に靡きて鬚の状を爲すもの常に畫きて祝賀の龜とす、綠毛龜、綠衣使者、

みまひ 見舞 人の轍子を訪ひ聞くこと、存問、過存、臨存、省問、脩問、起原、問安、以上は普通通用ふる語にて、祇候、伺候

上禮は自分より遙か身分よき人に對して用ふ、

みゝ 耳 顔の兩側にありて、音響を聞く機關なり、身軀、體、脯、天柱、

みゝかき 耳爬 耳の垢を取る具なり、耳搔、耳爬子、

みゝくそ 耳糞 耳に生ずる垢をいふ、耳垢、耳塞、腦膏、泥丸、

みゝず 蚯蚓 蟲の名、體圓くして細長なり、地中に棲む、引無、歌女、鳴初、土龍、地龍子、附蚓、無心蟲、巨蟻、

みゝたま 耳環 耳のたばにつけて、一種の裝飾とする物、垂珠、明瑠、

みやうばん 明礬 礬物の名、色白くして物を洗ふに用ふ、礬名、涅石、羽涅、羽澤、

みやがた 宮方 宮家の人々は、即ち、皇族がたのこと、用室、天潢、親王、枝我班、

みやげ 土産 他出せし者、其地の名物を買ひ求めて、家人に與ること、土産、土貨、土毛、

みやて 都 帝王の在らせらるゝ處、宮庭の義、京師、殿下、鞆下、帝京、天莊、日畿、帝畿、芝甸、帝郷、畿畿、紫路、

みゆき 行幸 天子の宮を出て、他所へ出て給ふこと、巡幸、省方、展義、陟方、巡狩、移伏、宸遊、

む

むがくしや 無學者 學問無き人、没字碑、無字碑、麒麟授、

むかし昔 今より過去は凡て數十年、數百年前の時をいふ、昔者、昔日、往昔、昔時、舊時、往古、昔年、往年、太古、上古、昔、

むかひ 百足 やすでに似て、稍大なる昆蟲、千龍、

むかひかせ 向ひ風 風の吹き來る方角に向ひて行くをいふ、面風、逆風、颯風、

むかふきし 對岸 此方より水を経て、彼方の岸をいふ、向岸、彼岸、

むぎ 麥 五穀の一にて、我が國にては米に亞てる大切なる食物なり、首種、六田之首、

むくげ 木槿 灌木にて、花莖に似たれば、木槿といふ、舜華、舜英、日給華、日及、玉蕤、麗木、刺開華、落花、裏梅花、時容、

むこ 婿 婦人の家に男子の歸ぐる者、婿、女借、半子、東垣、布代、婿客、館甥、回門、反馬、轉馬、女婿、

むしば 虫齒 齒が漸々腐敗して苦痛を感ずること、殊牙、虫牙、齲齒、

むたくひ 何の効もなきに無益に食すること、徒食、冗食、遊食、間食、

め

め目 動物の面にて鼻の上の左右にある孔にて、物を現る

ことを用る、まなともいふ、懸珠、島珠、阿堵、面淵、點漆、

めひ 姪 兄弟の女の子のこと、姪女、猶女、

めいし 名刺 自分の住所姓名を書きたる小き紙、名帖、通刺、畫刺、

めうが 若荷 草の名、山谷または竹木の林中に生ず、蕪荷、嘉草、辣草、

めかけ 妾 本妻の外に、妻同様にする女、小婦、小妾、旁妻、外婦、側室、下妻、

めかけのこ 妾の子 庶子、女子、別子、支子、

めがね 眼鏡 老眼、又は近眼の人が之を用ひて物を明かに見る具、矮納、

めし飯 米穀を炊きたるもの食料とす、饌、朴舉、白祭、香飯、

めしいれざる 竹飯器 竹をあかて飯を入るゝ用に供するもの、香箕、稍箕、

めしたきんな 飯炊女 飯を炊き食事の用意を整ふる下女、食婢、鼎婢、飯妾、

めつき 金銀など他の鋼鐵の如き金屬の表面へ焼き付け、一見其物を全くの金又は銀の如く見せしむるをいふ、銷金、滅金、鍍金、

めなう 瑪瑙 馬の瑙の赤色なるに似たるより瑪瑙といふ、堅くして脆き礦物なり、丹石、文石、瓊漿石、漿水石、鬼切石、

めん 名物

めん 假面 狐、天狗など種々の形に作りて、小兒の面につけて、戯れ遊ぶもの、胡面子、胡公頭、代面、而其、假頭、面鬼兒、入面、めんぼり 麵棒 家具の名にて麵を廣く延す時に用ふる長さ五尺許の丸き棒なり、麵杖、

も

もうせん 毛氈 毛織の敷物の名、毛毯、毛席、毛氈、擦毛席、絨單、

もぞき 萌黄 黄と青との混合色の薄きもの、正官綠、瓜皮綠、百練、

もぐらもち 鼯鼠 地中に穴を穿ちて住み、決して太陽を見ざる鼠に似たる小獸なり、鼯鼠、鼯鼠、田鼠、地鼠、地拍、

もてあそびもの 持遊物 小兒のおもちゃ、玩具、玩器、弄器、玩弄物、玩物、

もちり 喪中 血屬の死したる爲め、其喪に居ること、制中、喪次、喪居、

もちや 餅屋 餅を賣る家、餅店、

もどね 本値 物品の始め買ひ入れし時の、實際の値、元直、原値、原價、元價、本價、

もろのぶらこ 舊の都 先きに帝王の住居し給ひし所、舊

ものほ

七九四

ものほしさを 物干竿 衣類などを掛け乾す竿、衣竿、衣桁、ものみ 物見 事物の様子を窺ふ人、斥候、候吏、哨兵、探士、探人、歩探人、探細人、塘兵、塘兵、ものみやぐら 物見樓 遠方の物までも見る爲めに作れる高き樓、看樓、看街廳、臨街廳、

もちつき 望月 大陰十五日に至り満月となれるをいふ、辰、もんばん 門番 門の側に居て、出入する者を注意する人、門者、門公、守門奴、門兵、監門、辰門、門人、門皂、門子排門人、把門人、

ものほな 桃花 春薄紅色の花を開き稍梅に似其實は梅の大なる如し、武陵花、青花、昭上花、

もいろ 桃色 薄紅色のこと、水紅色、桃紅、

もやう 模様 染物縫物などに飾の形をつけしもの、花樣、花文、もり 厩城 海上より上る唇氣が、種々の形を爲すもの、唇氣壁(ミライシ)の類なり、夢溪筆談に登州の海中時に雲氣あり、宮室臺觀城塞の如し人半車馬冠蓋歴々として見る可し之を海市と云ふとあり、海市、乾城、

や 矢 弓弦に番へて射て敵にあつるもの、飛郎、箭、傍徨、信

往、白羽、赤羽、飛鳥、電燈、

やうし 養子 他人に養れて其嗣となるもの、繼子、螟蛉、

やうじ 楊枝 齒を掃除し研ぐ具、齒刷、齒木、剔牙杖、挑牙、齒托、牙棒、

やすで 馬陸 虫の名、夏月、水濕の朽ちたる爲め物などに生ず多く、雨後に出づ故に古名雨彦と云ふ、長さ八九分位のむかでに似たり、馬蟻、馬蚰、馬蝨、馬陸、百足、百節、千足、馬陸、蛆、

やすね 安直 物品の價の高價ならぬこと、低價、賤價、低廉、賤直、廉直、

やせた 瘠田 米穀のよく實のらざる田、瘦田、薄田、埤田、やせぢ 瘦地 肥沃ならず、草木の生長よろしからぬ地、瘠土、瘠地、瘠薄、

やどや 宿屋 旅人の宿る家、客舎、傳舎、逆旅、舘舎、次舎、路室、旅宿、旅人宿、

やなぎ 柳 樹の名、種類多けれども枝を地に垂るもの、最も珍重さる、御柳、河柳、三眼柳、三春柳、赤楊、雨師、垂絲柳、

やはら 柔術 白折、打手、打券、

やぶれきもの 破着物 破れたる着物、破衣、風尾袍、百結亂、

やぶれづ 徹履 破れたる履物、敗履、

やま 山 土地の高く築立てる處、翠微、長坡、玉筍、翠屏、丹

梯、青雲梯、碧玉簪、青螺髻、

やまがらす 山鴉 鴉の一種、背も腹も肥大にして食を食ること甚だし、みやまがらすともいふ、(深山鳥)赤嘴鳥、

やまがらう 山牛旁 山野にある草にて根を取りて薬用とす、商陸、馬尾、夜呼、白昌、室陸、草柳、荒陸、

やまづじ 山躑躅 五月頃山野に花咲く灌木なり、杜鵑花、紅躑躅、川鶴花、映山紅、山石榴、山客、

やまのいたゞき 山頂 山岳の頂上のこと、山嶺、山頂、絶頂、山椒、

やまのせ 山脊 山の太陽に面せざる背の方、山脊、嶺背、

やまのなかほど 山腹 山の頂と麓との間一帯の地のこと、山腰、半腹、嶺腹、

やまのはし 山の端 山の突屹としてつきいでたる處、山牙、山嘴、山尖、

やまのふもと 山麓 山の下の方ないふ、山脚、山趾、山足、

やまのわかれ 岔 山の分れし脈、分岐、山岐、岔嶺、

やまびこ 山彦 (一)山の神「神無月、しぐるし度の、山びこに、紅葉を風の、手向けつる哉」山彦 (二)反響とて此方にて發せる音聲が彼方の山に當りて返へり響くこと、山響、谷響、

やまみち 山路 山地の崎嶇として、険しき道なり、山徑、山道、



やみのよ闇の夜 暗くして事物を辨別し難きやうなる夜、晴夜、闇夜、やみよ、冥夜、

ゆ

ゆふひ 夕日 太陽の西に没せんする夕方の光りをいふ、日斜、日斜丁、斜照、夕陽、

ゆか 牀 家の内に地より数尺高く根太をおき其の上に板を張りたるをいふ、樓、節、日斜、夢友、獨座、

ゆき 雪 水蒸氣の凍りて花形をなして冬降るもの、六花、飛花、銀花、氷花、玉塵、玉屑、六出、銀花、凝雨、白鹽、瑞葉、仙藻、玉花、天花、祥英、玉燭、剪水花、玉沙、雨花、

ゆきのした 虎耳草 草の名、一根に數葉布生す、生は圓扁にして盤殼の如く、邊に岐ありて厚し、面は綠紫にて、白紋紫毛あり、背は毛なく、淡紫なり、夏に至りて、一尺許の莖を生ず、金絲荷葉、石荷葉、

ゆず 柚 樹の名、葉は復葉にして、枝に刺多し、其の實もゆずといふ、密柑より大なれども酸味つよし、條、蜜圓、蜜柑、臭橙、蜜柑、朱欒、

ゆすらうめ 櫻桃 庭園に植みて花を受す、實は梅に似て小なり、含桃、手桃、英桃、夢英、朱棗、櫻珠、鶯桃、蠟珠、紅珠、金丸、火齊珠、朱砂果、

ゆたんぼ 湯婆 湯を器に入れて寒き日、身體を温むる器、脚

よ

よあけ 夜明 夜の明け方、即ち朝早く薄暗き頃をいふ、天明、明旦、昧黎、黎旦、黎明、暁朝、平旦、

よきあは 善き粟 よく繁茂し、よく豊熟せる粟をいふ、善禾、資通、

よきあめ 好雨 丁度よき折りに降る雨、時雨、靈雨、膏雨、甘雨、歡喜雨、一拆雨、

よきいぬ 良犬 善き犬をいふ、善狗、葵、輕足、好犬、

よきいへがら 善き家柄 先祖代々善き家系をいふ、門閥、門地、門胃、譜第、華胃、貴胃、才地、地望、

よきうま 善牛 牛譽、丁標、郭椒、丁牛、

よきうま 良馬 善き馬をいふ、天驥、盜驪、

よきひ 良日 晴明なる日若しくは十干十二支等にてよき日のこと、今日、勝日、

よきほし 夜通し 夜を徹して、曉までに及ぶこと、透冥、通星夜、徹夜、

よなか 夜中 夜の真中、中宵、夜半、午夜、中夜、丙夜、子夜、夜分、夜參半、三更、丙夜、

よみのみやうじやう 夕明星 金星のこと、日暮れがたに現はれて能く輝く星、ゆふづーともいふ、金星、太白、長庚、太羅、明星、啓明、大彗、長庚、

婆、鋤奴、温足、瓶、湯婆子、温爐、

ゆめの 湯殿 浴するに設けたる室、風呂場、浴室、温堂、杉槽、漆斛、

ゆびわ 指輪 金銀などにて作り手の指にはめ飾りとなすもの、鍍環、戒指、手記、瓊環、

ゆふたぢ 夕立 夏の夕暮に、雲俄かに立ちて、降る雨、また直ちに霽ること多し、白雨、暴雨、凍雨、酸雨、

ゆふやけ 夕焼 日没前に、太陽の光に映じて浮雲の赤江色に見ゆるをいふ、江雲、江霞、暮霞、(暮霞千里を走るとは翌日晴天の兆なることを意味す)

ゆみ 弓 竹または木を曲げ弦を張り矢を射て、獸を取り、または戦になご川ふ、曲張、弭、活、潘尙書、于勁、嬰圃老人、

ゆみはりつき 弓強月 上弦の月のことなり、七八月頃に半圓形をなせるは恰かも弓を張りしやうなるに依り、此の名あり、缺月、玉鈞、古麗鈞、玉弓、明弓、半月、御日、

ゆみぶくろ 弓袋弓を容る、袋、弓衣、弓藏、

ゆめあはせ 夢合 夢の吉凶を判断すること、相圓、圓夢、解夢、

ゆり 百合 夏期に生しき花咲く植物なり、花の白きを白百合とて殊に美し、其の地下莖は食ふべし、百合、摩羅、中庭、重邁、中庭、強盟、倒仙、玉手爐、

よめいりだうぐ 嫁入道具 婦人が他家に嫁する時、持り行く道具、粧奩、奩具、嫁奩、

よもぎ 艾 山野に生する草の名、春其若葉を取り、餅に入れ草餅といふ、又其葉を取り、乾してもぐさを製す、氷台、艾蒿、病草、醫草、黃草、福徳草、草師裝、肚裏、屏風、

よもすがら 終夜 日暮より通して曉方まで、夜も盡の意ならんと云、よすがら、よひとよ、よごほし、通昔、極夜、徹夜、

よるのいつ、夜の五つ 舊制にて戌の時、今の午後八時なり、黄昏、戌隸、

よるのなつ、夜の七つ 舊制にて寅の時、今の午前四時なり、戌夜、五更、

よるのやつ 夜の八つ 舊制にて丑の時、今の午前二時なり、鷄鳴、丑土、丁夜、四更、

よるのよつ 夜の四つ 舊制にて亥の時、午後十時にあたる、人定、亥興、乙夜、二更、

よるのこひのも 喜びの雲 天氣晴明にして、能く佳節に應じて、現はる、雲をいふ、慶雲、瑞雲、芳雲、景雲、

よろひ 鎧 武人の被る、鐵、又は皮製の戎衣、甲介、人鎧、千金使、鐵室、渾身鎧甲、

ら

らうか 廊下 家と家との間などに、細き通りの板張りにせ

る處、重勢、麻原、  
**らうかん** 琅玕 寶石の名、青珠、石珠、石關子、  
**らうにん** 浪人 諸所を流浪して廻る武士、又、定まりたる主なき人、浪士、遊士、處士、傳邊臣、居子、居士、處子、  
**らうや** 牢屋 罪人を囚へて入れ置く家、即ち監獄、獄屋、牢獄、圍土、請室、籠煙、深室、夏室、夏里、圍圍、念室、動止、司空、犴戸、圍關、圍控、  
**らうやぶ** 牢破 監獄を破りて逃げ出づること、又其の人、逃牢、越牢、逸牢、  
**らくた** 駱駝 馬に似たる大なる獸物にて、脊に一つ若しくは二つの瘤の如きものあり、多く亞刺比亞、亞弗利加等の沙漠に住む、山驢王、物牛、肉屏、  
**らくたん** 落膽 力を落すこと、破膽、膽落、失魂、失魂魂、失神、  
**らしや** 羅紗 毛織の布にて西洋にも多く産し、洋服、外套等に作る、多羅紗、  
**らつきよう** 薙 葉は葱に似て長く細く、一根より叢生し、根には、のびるの根の如き太き部あり、之を取りて食す、鴻葱、火葱、菜芝、白華、守宅、家芝、  
**らふそく** 蠟燭 鈞燭、風膏、光濟豆、脂炬、朱蠟、蠟炬、龍膏、風炬、蒸炬、  
**らふばい** 蠟梅 濯木にして冬、花を開き、香氣高し、奇友、

らんかん 欄干 橋階榭側等の端に作れるてすり、欄檻、衡、重櫺、木勾欄、欄杆、疎欄、  
**りうせい** 流星 飛ぶ星をいふ、初秋の夜、殊に多し、是れ隕星の飛びて、大氣中を通過する時に光を發する物なり、奔星、營頭、天使、地雁、天雁、飛星、  
**りえん** 離縁 夫婦相離れ、縁を切ること、大歸、離婚、長還、  
**りんご** 林檎 果實にして外面柿の如く、内實は、稍梨に似たり、來食、蘋果、文林果、花紅、沙果、  
**りよう** 龍 想像の動物の名、鱗虫の長と云ふ、智虫、神物、雨師、震鱗、  
**るくは** 類火 火事にて、他より燒け來りて我家をも燒くこと、延燒、延燎、鄰火所逼、  
**れんこん** 蓮根 蓮の根、通常吾人の食する部分、光旁、荷根、水丹芝、加實、玉臂龍、青事三、雨草、玉節、  
**れうりばん** 料理番 料理をする人、包人、養子、

ろ

る

**ろうぜう** 籠城 城に籠りて敵と戦ふこと、城守、嬰城、  
**ろくげつ** 六月 夏の暮き時、炎熱に苦み、清風を待つ如き月なり、風待月、水無月、季夏、林鐘、常夏月、潤月、火月、瓜期、鳴神月、朔月、陽水、水潤月、元陽、素商、  
**ろくじふさい** 六十歳 耳順年、杖鄉辰、  
**ろくわい** 蘆薈 熱帯地方に産する香料、黒色にして光澤あり、如會、調會、奴會、象膽、鬼丹、

**るくは** 類火 火事にて、他より燒け來りて我家をも燒くこと、延燒、延燎、鄰火所逼、  
**れんこん** 蓮根 蓮の根、通常吾人の食する部分、光旁、荷根、水丹芝、加實、玉臂龍、青事三、雨草、玉節、  
**れうりばん** 料理番 料理をする人、包人、養子、  
**るくは** 類火 火事にて、他より燒け來りて我家をも燒くこと、延燒、延燎、鄰火所逼、  
**れんこん** 蓮根 蓮の根、通常吾人の食する部分、光旁、荷根、水丹芝、加實、玉臂龍、青事三、雨草、玉節、  
**れうりばん** 料理番 料理をする人、包人、養子、

なんせん 名物

猶子、同産子、家駒、従子、  
なんせん 温泉 地中より湧出する温かき泉、沸泉、湯泉、  
おんなのみ 女髪 女の頭髪をいふ、雲篋、玉華、雲玉、香雲、  
綠雲、烏雲、

八〇〇

26/5/41  
名物

明治三十八年四月一日印刷  
明治三十八年四月八日發行

作文新辭林  
定價金壹圓貳拾錢



著作權所有

編輯者 島 健

東京市麹町區飯田町五丁目廿六番地

發行兼印刷者 櫻 井 庄 吉

東京市京橋區柳町五番地

發行者 篠 崎 純 吉

東京市日本橋區通旅籠町十一番地

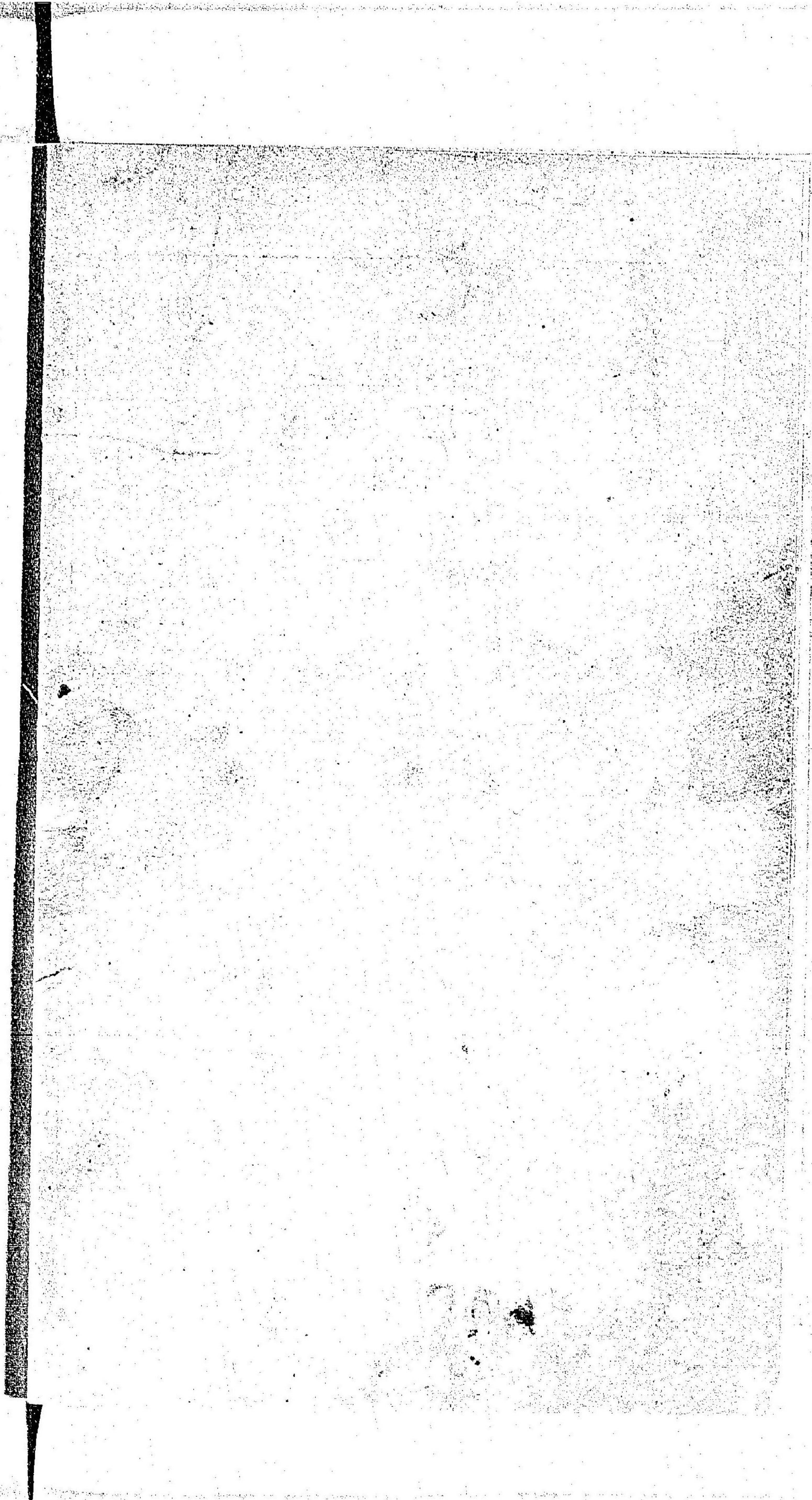
印刷所 郁 文 舍 印刷部

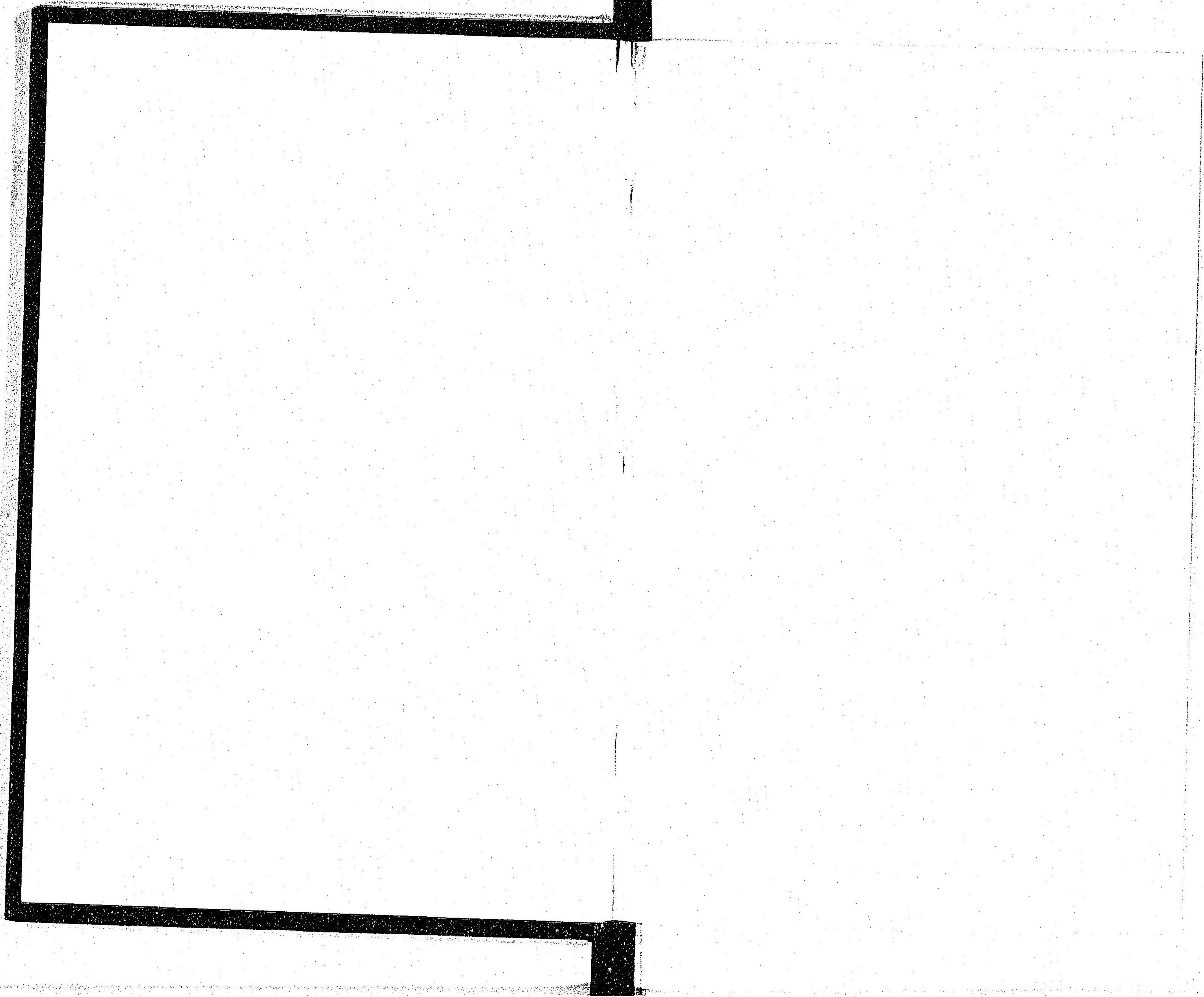
東京市日本橋區上栴町十六番地

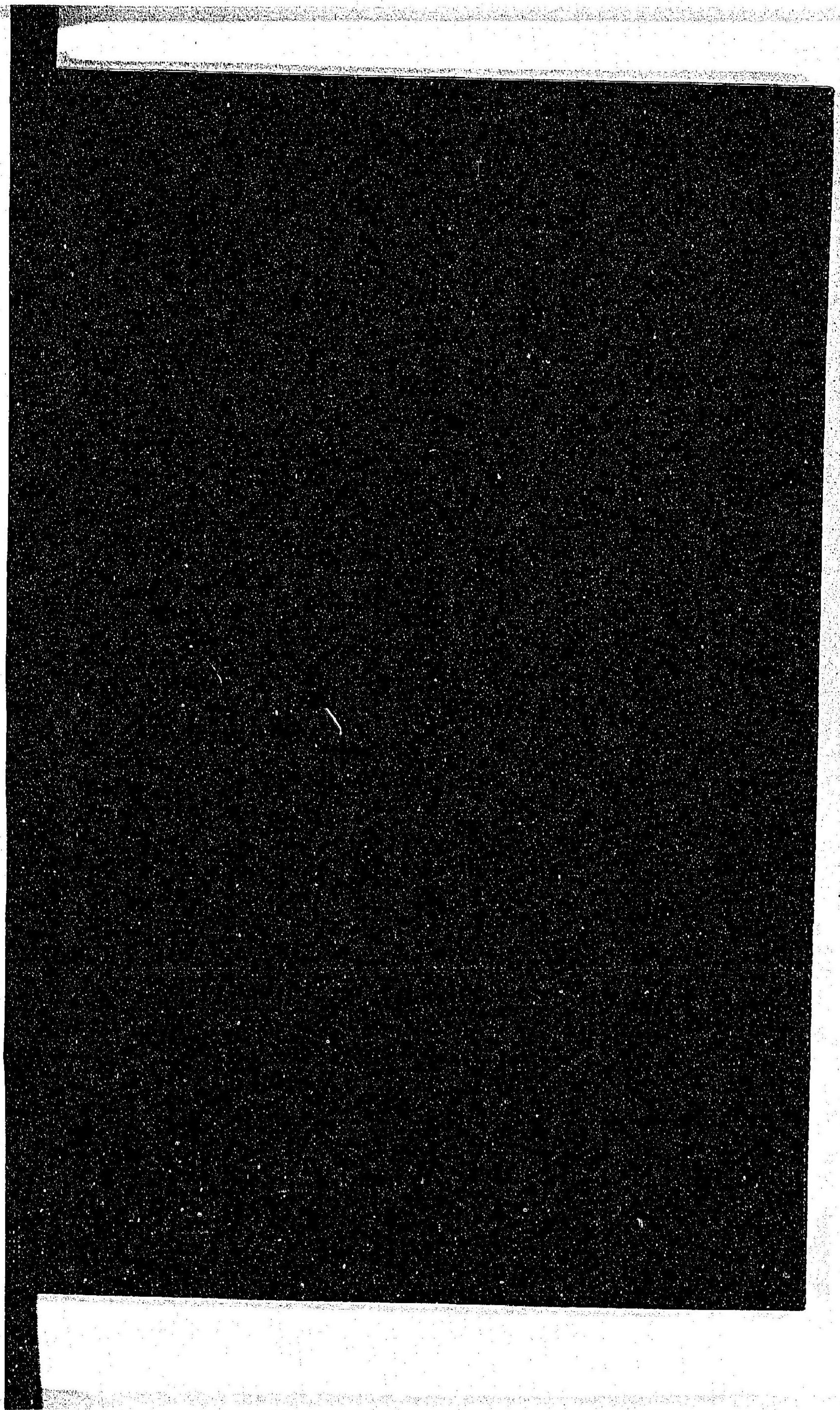
發行所

東京市京橋區  
柳町五番地 (電話本局 三〇〇〇)  
大阪市東區  
南本町四丁目 (電話東 三三八四)

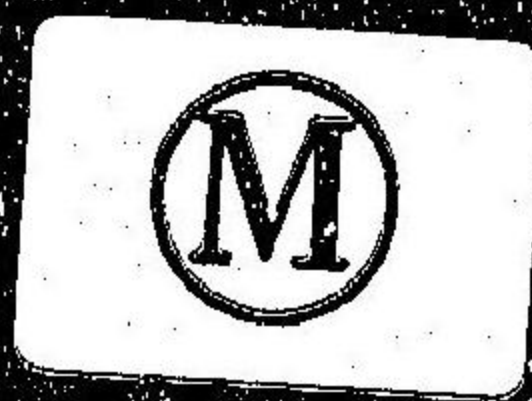
郁 文 舍 積 文 社







98  
104



077617-000-3

98-104

作文新辞林

畠山 健/編

M38

DAC-0982

